

アスセナ・マイサニ，その人と足跡

— 生誕100年によせて —

(日本タンゴアカデミー機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」No. 10(2002) pp. 92-99に掲載されたものについて、指摘された誤りを訂正した改訂版。訂正部分は下線で表示)

齋藤富士郎

タンゴの女性歌手といえば、なんと言ってもロシタ・キログ、メルセデス・シモネ、アスセナ・マイサニの御三家にアダ・ファルコンとリベルタ・ラマルケの二人を加えた五人組が圧倒的に他を引き離している。そして今年(2002年)1月にファルコンが亡くなって五人組はすべて故人となってしまった。これも時の流れである。今年がマイサニの生誕100年にあたるということで、本誌の編集部から執筆の依頼をいただいた。それで末尾に示した限られた資料を頼りに一文を草してみた。間違った記述などあればそれはすべて筆者の責任である。

先ずマイサニの経歴を参考資料[1, 4-8]を拠り所に簡単に型どおりに年を追って記してみよう。

マイサニは1902年(日本流に言えば明治35年)11月17日の生まれである。本名はアスセナ・ホセファ・マイサニ、父親はドイツ出身のルイス・ホセ・マイサニ、母親はイタリア、カラブリア地方出身のマルガリータ・カピサノ(イタリア語読みではカピツァーノか)とある。

1921年[6](文献[5]では1920年と記載されている)にフランシスコ・カナロが出演していたピガル(ナイトクラブかキャバレーの類の店であろう)にアマチュアとして出演してカナロの目に止まった。観客には受けたらしいが、その時はそれだけでそれ以上は何も起こらなかった。この時、カナロは彼女の名前を知らなかったので髪の色にちなんで「アサバチェ」と紹介し、これがその後の彼女の綽名となった。

その後アポロ劇場のコーラスガールとしてのオーディションを受け、1923年に端役として出演し、またいくつかの無声映画にも出た。ビッグチャンスは彼女がエンリケ・デルフィノに出会った時に訪れた。デルフィノから彼女を紹介された劇場マネージャのパルクアル・カルカバロは彼女のためにタンゴ「Padre nuestro」を作詞し、デルフィノが作曲した。1923年6月23日にマイサニはナショナル劇場でメリコ(サルバドル・メリコのことか?)のオルケスタの伴奏で「Padre nuestro」を歌った。これが大成功で、その夜彼女はアンコールに応じて5回も歌うこととなった。そしてこれが彼女の大成功の始まりであった。この曲のオデオン・レコードへの録音は1924年で、彼女の初録音でもあった。

1924年にアルヘンティーノ劇場に移り「La cabeza de Italiano, 「Cascabelito」を

初演する。1925年にはサン・マルティン劇場に移り、「Organito de la tarde」, 「Silbando」, 「Callecita de mi barrio」を初演する。この時に出演したレビュー「La Octava Maravilla」にはアダ・ファルコンも共演していたらしい。またこの時にホセ・ゴンサレス・カスティジョの勧めで初めて男装し、フィリベルトとブルノの「Langosta」を歌った。

1926年にエンリケ・ランドと二重唱を組んで国内巡業をする。ラ・プラタ市のクラブ「イデアル」で「Perdon viejita」と「Siga el corso」を初演し成功を収める。同年、ブエノス・アイレスに戻りラ・コメディア劇場で「A media luz」と「Alla en el bajo」を歌う。1927年には「Tus besos fueron mios」, 「Alma en pena」, 「Amigaso」, 「Yo te bendigo」, 「El ciruja」, 「Por donde andaras」を初演する。

1928年にマイボ劇場に移り、「Andate con la otra」と「Portero, suba y diga」を初演する。同年10月にはアウストラル劇場で「Aquel tabado de arimin~o」と「Malevaje」を初演する。またこの年に「Pero yo se」を作曲した。1929年にコミコ劇場で「Soy un arlequin」を初演し、サルミエント劇場で「Pero yo se」, 「Llevatelo todo」, 「Hacelo por la vieja」を初演し熱狂的支持を得る。同年、ブルンスウィック・レーベルとラジオ・ベルグラノーと契約し、チリに巡業する。また「Porque se fue」を作曲する。エンリケ・サントス・ディセポロが世に知られるようになったのも、彼女による「Esta noche me emborracho」と「Malevaje」の初演のお陰であった。ディセポロはマイサニを彼の歌詞のための理想の歌手と見ていたということである。

1931年にはロベルト・セリジョ、オレステス・クファロ、ホアキン・マウリシオ・モラらを含む25人からなる大劇団を編成し、スペインに遠征しマドリードのアルカサル劇場に出演して大成功を収める。その後1932年にはポルトガルのリスボンのマリア・ビクトリア劇場、リボリ劇場、セントラル・シルコ劇場に出演する。CDの「Buenos Aires to Madrid Argentine tango bands in Spain 1927-1941」(HQ CD 88)に復刻されている「Deci que si」と「Usted sabe sen~or juez」はこの旅の途中で録音したものであろう。ブエノス・アイレスに戻った彼女はポルテニョ劇場でロメロとクファロと合作した「La cancion de Buenos Aires」を歌う。このタンゴはガルデルによって録音されるという榮譽を担うこととなった。

マイサニが出演した映画には「Tango(1933年)」(これにはティタ・メレロ、リベルタ・ラマルケ、アルベルト・ゴメスらが共演している), 「Monte criollo(1935年)」, 「Di que me quieres(1938年)」, 「Nativa(1939年)」などがある。

1939年には南米、中米諸国と米国を巡業した。

1955年にモンデビデオでラジオ・エル・エクスぺクタドールとラジオ・センテナリオに出演する。1950年代にオルフェオ・レーベルに僅かの録音をし、1959年にボクソル(Voxor)・レーベルに最後の録音をする。1960年にアルベアル劇場に出演し「Padre nuestro」を37年ぶりに歌う。1961年、ブラジルに巡業しコパカバーナ・レーベルに録音する。

1962年、アストラル劇場での引退ステージを最後に芸能界を引退する。

1970年1月15日、アセナ・マイサニ逝去、享年67歳。タンゴ女性歌手五人組の中では他の四人ほど長命ではなかった。

マイサニは作曲者としても優れた曲を残している。代表作は言うまでもなく“Pero yo se”と“La canción de Buenos Aires”であるが、その他にも“Dejame entrar, hermano”, “Aguas tristes”, “En esta soledad”, “Vuelve, Negro”, “En tu olvido”, “Pensando en ti”, “El idolo roto”, “Lejos de mi tierra”, “No salgas de tu barrio”, “Porque se fue”, “Deci que si” (Ranchera), “Remigio” (Ranchera)などがある。

このような経歴からもわかるように、マイサニは基本的に舞台の人であり、真に華やかな芸歴の持ち主である。男装して非常に男性的なタンゴを歌って人気を集めたというから、我国の宝塚歌劇のかつての水之江瀧子のような存在であったのだろう。アルゼンチン版「男装の麗人」（これも今では死語になった）というところか。「レコードではマイサニの実像には迫れない」とはブエノス・アイレスの古老の言葉である[1]が、そう言われても今日のような録画技術の無い時代の話であるから、残念ながら我々にはその実像を知るすべが無い。僅かに残されたフィルムで我慢するしかない。

1923年から十数年間の華やかな芸歴とくらべると1940年代以後の経歴は些か寂しい。これはやはり加齢の結果としての声やその他の肉体的な衰えによるのであろう。実際、彼女の歌声は1930年代半ばを過ぎると次第に年齢を感じさせるようになる。もっともこのようなことはマイサニに限らず誰にも起こることである。早々に引退したキロガ、歌手生活を捨てて修道院に引きこもったファルコン、それに国外亡命せざるを得なかったラマルケは結果として世間にそのような印象を与えることを巧みに逃れたとも言える。この点で女性は男性に比べてハンディキャップが大きい。歌手の場合でも俳優の場合でも女性よりも男性の方が平均的に活躍期間が長い。これは日本に限らず諸外国でも同様である。こればかりは憤慨しても仕方が無いことである。もっとも最近ではネリー・オマールなどは高齢にもかかわらず現役であるし、ラマルケも死の直前まで現役であったらしいから、こういう男女差も段々と無くなって行くのであろう。

マイサニは「アサバチェ」以外にも「ラ・レイナ・デル・タンゴ」、「ヌエストラ・セニョラ・デル・タンゴ」、「エル・アルマ・デル・タンゴ」など色々なニックネームを呈されているが、最も有名で人々にも親しまれているのは周知のように「ラ・ニヤタ・ガウチャ」である。マイサニは白色人種にしてはやや平たい印象を与える容貌かもしれないけれども、若い時はなかなか可愛くチャーミングである。その彼女に向かって「ニヤタ（低くて鼻の穴が上を向いた獅子鼻）」とはいくら何でもヒドイ。しかしそれが彼女を一層有名にするのであるから世の中は皮肉なものである。このニックネームは1935年にLR3による「ミス・ラジオ・ナシオナル」選考会においてラマルケがマイサニをこう呼んだのが始まり

[6, 7]で、その後彼女はずっとそう呼ばれることとなったということである。しかしこのニックネームの命名者はメルセデス・シモネであったという説もある[5]。

藤沢嵐子さんの伝聞によればマイサニとシモネは互いに非常に仲が悪かったということである。藤沢さんが実際に二人と同席した時の様子では、そう見える節は全く無かったが、人々はこの二人の陰悪な間柄をよく噂していたということである。それはどうやらこの二人がかつてカルロス・ガルデルを間に互いに恋敵であったということによるらしい[2]。そのガルデルはマイサニを「仕事上」でも「個人的」にも強くサポートした[5]ということであるが、「仕事上」はともかく「個人的に強くサポート」とは何を意味するのか。ガルデルの訃報に接してマイサニは真実の愛の涙を流した[7]ということであるが、二人は実際にどれ位「親しい仲」であったのだろうか。

今日、我々はマイサニの芸をレコードを通じてしか鑑賞することが出来ないし、先に述べたようにそれでは彼女の本当の姿を知ることは出来ないのかもしれない。しかしそれは仕方無い話である。そしてレコードだけからも彼女の抜群の実力は十分に窺い知ることが出来るのである。マイサニの録音歴は

- DNオデオン第1期(1924年～1929年)
- ブルンスウィック期(1929年～1931年)
- 1931年にスペイン・グラモフォンに録音
- オデオン第2期(1934年～1935年)
- 1938年に米国RCAビクターに録音
- 1939年にオデオンに録音
- ビクトル第2期(1942年～1943年)
- オルフェオ期, その他(1953年～1961年) (1961年はブラジル録音)

のように整理できる[1][9][10]。DNオデオン第1期からビクトル第2期までのものについては限られた曲数であるがLPやCDの復刻版が出されている。オルフェオ期についても数曲がLPに復刻されている。

マイサニの歌を一言で表現するならば「ドラマティックな歌唱(canto dramático)」と言えるだろう。しかし「ドラマティック」と言ってもそれはテンポを大幅に揺らし、アクセントを大仰につけた、殊更に芝居気たっぷりの歌い方ではなく、聴きようによっては「淡々とした」歌い方とも言える。それでいて歌そのものは大変にドラマティックである。これが真の実力と言うものであろう。しかしこれはあくまでスタジオ録音によるレコードを聴いた時の印象であって、大勢の聴衆を相手にした全盛時代の舞台での歌唱はレコードで聴くのとはかなり違ったものであったのだろう。オスカル・デル・プリオリの製作になる1940-50年代の未発表(1曲を除く)のライブ録音を集めたLP(“AZUCENA MAIZANI la n~ata gaucha, SHOWRECORDS LP2)ではもっと聴衆の存在を意識した歌い方であり、全盛時代のステージを偲ばせる(声はかなり衰えているが)。この時代は藤沢嵐子さんが訪垂

された時期に重なっており、実際にステージを見た藤沢さんは「マイサニ女史は、ステージで老眼鏡を掛け、歌詞を書いた紙片を手にして歌うのである。それでも聴く方は、十分感激して聴いている。」[2]と半ば呆れ気味である。このライブの場合もそうであったのだろうか。

DNオデオン第1期の、特に初期においては、マイサニの若々しい歌声を楽しむことが出来る。しかし歌い方自体には硬さを残しており、未だ発展途上にあることを窺わせる。それが後期になると真に堂々とした歌い方になってくる。残念なことに彼女の若々しい歌声はDNオデオン第1期からブルンスウィック期に移行するとともに失われてゆく（筆者の印象である）が、その代わり歌い方は円熟味を増してくる。更にビクトル第1期からオデオン第2期、ビクトル第2期になると、歌は一層味わい深いものになってくるが、歌声にはかなり年齢を感じるようになる。それで筆者は個人的には、レコードで聴く限りにおいて、DNオデオン第1期後期からブルンスウィック期までがマイサニは声質と歌唱力とのバランスが最もよく取れていた時代ではなかろうかと思っている。

ここでマイサニの代表的な名唱のいくつかを挙げてみよう。但し筆者はS Pレコードのコレクターではないので引用はすべてLPかCDである。またマイサニの歌唱が収録されているLPやCDをすべて所有しているわけではなく、以下の記述は筆者の手許にあるLPやCDだけにに基づいていることを予めお断りしておく。

① Usted sabe sen^{or} juez

マイサニの名唱を1つ挙げるとするならばこれに止めをさすことは異論が無かろう。かつてポルテナ音楽同好会のレコードコンサートの席上で、故高山正彦先生が「マイサニにこう歌われたのでは他の歌手の出る幕が無い」と激賞されたことを筆者は記憶している。マイサニのドラマティックな歌唱の典型とも言える名唱である。曲そのものについてはタンゴ的な性格はやや薄く、より *cancion* 的であるとも言える。筆者の知りえた範囲ではマイサニのこの曲の録音にはブルンスウィック期 (A. M. P. CD-1092, MAGENTA 5019), ビクトル第1期 (RCA CAL-3176, 日本ビクター RA-5397), スペイン録音 (Harlequin HQ CD 88) の3種類ある。録音の時期にそう隔たりが無いのでどれをとっても甲乙は付け難い。かつて第2次大戦以前に日本ビクターから出されていた“VICTOR DANCE RECORD CLUB”というアルバムに収められていたS P盤は上記のビクトル第1期録音によるものであろう。藤沢嵐子さんもこの曲を大変立派に歌われているが (日本ビクター SJX-8536~7), それは恐らくこのS P盤を参考にしたものではないかと推測する。「タンゴ名曲事典」にはシルビーナ・デルイギという人の名前が挙がっているが、筆者はこの人のレコードは持っていないし、勿論聴いたこともないので論評はできない。

② Pero yo se

マイサニの作品としては最も人口に膾炙した曲で、彼女自身による録音の回数も多くま

た他の歌手によってもよく歌われている。センチメンタリズムを強調した泣き節ではなく、むしろさっぱりした感じの曲で、歌詞も当事者の嘆き節でなく傍観者の立場で書かれているところが一寸変わっている。それがかえって支持を得ている理由かもしれない。マイサニの録音は筆者の知り得た範囲ではDNオデオン第1期 (A. M. P. CD-1092), ブルンスウィック期 (A. V. ALMA CTA-5028), ビクトル第1期(推定) (RCA CAL-3176), オデオン第2期 (A. V. ALMA CTA-846), 1940-50年代のライブ録音 (SHOWRECORDS LP2) の5種類である。この中では1928年のDNオデオン第1期のものが、声も若々しく歌も伸び伸びした感じで第1番に推せる。ビクトル第1期とオデオン第2期のものは声の若々しさは失われているが、落ち着いた感じで説得力はむしろ向上したとも言える名唱である。ブルンスウィック期のものはバランスは取れているがやや中途半端な印象である。ライブ録音のものは、声は衰えているがそれを歌唱力でカバーしてそれなりに聴き応えがある。

③ La canción de Buenos Aires

これもマイサニの自作の曲として有名でありガルデルを始め多くの歌手や楽団が録音しているにもかかわらず、意外なことにマイサニ自身による録音は少ない。作曲した時期が比較的后期であったために自ら録音する機会に恵まれなかったのであろうか。「タンゴ名曲事典」によればオルフェオ・レーベルでの録音があるが復刻されているか否か筆者は知らない。筆者の手許にあるのはライブ録音によるもの (SHOWRECORDS LP2) のみである。1950年代も半ば近くのものとして推定され、かなり年齢を感じさせる歌唱であり、音も悪いが、それでも捨て難い味がある。

④ Esta noche me emborracho

復刻されているもの (A. V. ALMA CTA-846, A. M. P. TC 1016, A. V. ALMA CTA-5035) はいずれもこの曲が発表された1928年のDNオデオン第1期録音のものである。若々しい声を張り上げて一所懸命に歌っている印象を受ける名唱であるが、それだけに「ドラマティック」な要素は比較的薄いとも言える。彼女がこれを劇場で初演した時にはどんな歌い振りであったのだろうか。おそらくレコードから受ける印象とはかなり違っていたのではなかろうか。

⑤ Copa de ajeno

「タンゴ名曲事典」によれば曲が発表されたのが1941年(?)ということであるから当然録音はそれ以後で、現在復刻されているもの (RCA CAL-3176, BMG 74321 27571-2, BMG ビクター PDTD-1065) はビクトル第2期のものと考えられる。故高山正彦先生はかつて「フアン・カナロと言えば人は Ahi va el dulce を挙げるが、自分は Cope de ajenoの方をより高く評価する」と語っておられたが、その言葉を実証するような名唱である。

⑥ Malevaje

現在LPやCDに復刻されているものは1928年録音のDNオデオン第1期のもの (EMI 4195, EMI 4349, A. M. P. CD-1146, 東芝EMI TOCP-6816) と1950年前後のラ

イブ録音のもの (SHOWRECORDS LP2) である。EBCD 27 (el bandoneon) に収められているものは録音年の表記が無いが、恐らく 1928 年録音のものであろう。いずれも男性的なタンゴを歌うのを得意としたマイサニの特徴がよく出ており、ガルデルの名唱 (el bandoneon EBCD15) に勝るとも劣らず、むしろドラマティックな点ではガルデルを上回ると見ることも出来る。

⑦ Llevatelo todo

現在 LP や CD に復刻されているものは 1928 年録音の DN オデオン第 1 期のもの (CM 4164, A. V. ALMA CTA-846, el bandoneon EBCD27) である。ドラマティックな、かつ情熱的な歌唱でファルコンを思わせるところもある。

⑧ Milonga para Gardel

諸々の事情から考えるとこの曲はマイサニのためにあるようなもので、パチェコも歌っているがマイサニとは比べものにならない。50 歳を過ぎた頃のオルフェオ録音のもの (A. M. P. TC 1030) と 40 歳半ば頃の放送録音のもの (SHOWRECORDS LP2) がある。前者よりも後者のほうがライブであるだけにより感情を込めた歌唱になっていると思われる。

⑨ Madre

復刻されているもの (MAGENTA 13039, A. V. ALMA CTA-5028) はブルンスウィック期のもので録音時期は 1929 年と推定される。声質と歌唱力が最もバランスが取れていたと思われる時期のもので、聴いているうちにレコードの中に引き込まれてゆくように感じる名唱である。

これらの他にも Danza maligna, Pulpero sirva otra vuelta, Yira Yira, Hacero por la vieja など取り上げなければならない歌唱は数多くあるし、有名曲でなくても捨て難い名唱も少なくないが、与えられた紙数も尽きかけているのでこの当たりで止めておく。

冒頭述べたタンゴ女性歌手五人組の筆頭は言うまでもなくキロガである。一般的な「声楽家」という観点では何と言ってもシモネが圧倒的に他を引き離しており、その点ではキロガはシモネに遠く及ばない。しかしタンゴの歌手となると話は逆でキロガに及ぶ者は居ない。シモネとマイサニのいずれがキロガに次ぐ No. 2 に位置付けられるかは議論の分かれる所である。「声楽家」という評価軸ではシモネがマイサニを引き離していると思うが、一方、タンゴ乃至はタンゴ界に与えたインパクトの大きさでは、更にタンゴの女性歌手の地位向上に果たした役割に関しては、反対にマイサニがシモネを引き離し、それどころかキロガをも上回っているだろう。この御三家に比べればファルコンもラマルケも彼女らの後塵を拝することになる。ファルコンは、筆者は好きであるが、やはり活躍の範囲が狭い。ラマルケは若い頃の歌は素晴らしいが、大スターになって行くにつれて歌は次第に余技になり感動を与えることが少なくなってしまうと言わざるを得ない。

(追記) 本稿を送った後で編集担当の松本 保氏から以下のようなコメントをいただいた。

原稿を改めて書き直すとかえって混乱や間違いを生ずる恐れがあると考え、氏のコメントをそのまま追記の形で掲載させていただくことにした：

「USTED SABE SEÑOR JUEZ は BRUNSWICK (1930) とスペインの GRAMOPHON (1931) の2回の録音だけのようです。

ビクター系の復刻物はすべてスペイン録音のものだと思います。GRAMOPHON はビクターのヨーロッパにおける同一系列のレーベルなのでビクターとしても誤りではないでしょう。また、マイサニのスペイン録音は少なくとも次の6曲があるとされています。

1 USTED SABE SEÑOR JUEZ

2 PENSALO MUCHACHO

3 PERO YO SE

4 NO SALGAS DE TU BARRIO

5 TE ODIO

6 DECI QUE SI」

以上。

参考資料

- [1] 大岩祥弘, 「改訂版 アルゼンチン・タンゴ — アーティストとそのレコード」, (株)ミュージック・マガジン 1999年), pp. 279-284
- [2] 藤沢嵐子, 「タンゴの異邦人」, (中央公論社 昭和31年), p. 124, pp. 129-130 ; 「藤沢嵐子タンゴの本 ブエノスアイレス〜東京」, (中南米音楽 1981年), p. 79, pp. 82-84
- [3] 石川浩司 (編), 「タンゴ名曲事典」, (中南米音楽 1998年)
- [4] <http://www.elportaldeltango.com/personas>
- [5] Simon Collier, Artemis Cooper, Maria Susana Azzi, Richard Martin, "Tango The Dance, The Song, The Story", (Thames and Hudson 1995), pp.141-142
- [6] Oscar del Priore (h), "Azucena Maizani Biografia", AZUCENA MAIZANI la n[~]ata gaucha, SHOWRECORDS LP2 (LP), ライナーノート
- [7] Roberto Cassinelli, ESCUCHANDO A AZUCENA MAIZANI, RCA CAL-3176 (LP), ライナーノート
- [8] Osvaldo Castillon, "PERO, YO SE" AZUCENA MAIZANI (LA N[~]ATA GAUCHA), Odeon 4164 (LP), ライナーノート
- [9] Roberto Gutierrez Miglio, "EL TANGO Y SUS INTERPRETES Vida y discografia de los cantores y cansionistas del tango" Tomo II
- [10] 馬場明人, タンゲアンド・エン・ハボン No.12 (2003) pp.38-41